



アラスカ州の震災漂着物

山本 直人 (考古学)

2011年3月11日午後2時46分、皆さんはどこで何をしていたでしょうか。私は地下鉄東山線の電車の中にいました。3月14日から米国のカリフォルニア州パークレーとネブラスカ州リンカーンに調査に行くことになっていたため、その準備のために出かけていました。この時刻に発生した東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波の影響で、同行する予定だった東北大学の研究者は渡航することができませんでした。

東日本大震災で生じた漂流物が太平洋の海流によってアメリカやカナダの海岸に打ち上げられたことは、新聞やテレビを通して報道されたので覚えている方も多いと思います。今年7月にアラスカ州のプリンス・オブ・ウェールズ島にある貝塚の調査に行ってきました。同島はアラスカ州の最も南にある島で、その西側にクレイグという小さな町があります。そこには震災漂着物が展示されている施設があり、水上飛行機の搭乗までに少し時間があつたので見学してきました。今回は東北大学の研究者も一緒に、自身も被災者であったこともあつてか、漂着物を熱心に見ていました。

日本の考古学や文化財科学では、東日本大震災を契機として遺跡に残された地震災害・津波災害の痕跡を減災社会の構築に役立てることに以前にもまして関心が集まっています。こうした動向の一環として、10月14日(月、体育の日)13:00~16:30、名古屋大学野依記念学術交流館で公開講演会『文化遺産と科学—過去に学ぶ防災—』が開催されます。入場無料ですので、興味のある方は是非ご参加下さい。



アラスカ州の施設で展示されている震災漂着物

授業紹介—File62

中世の日本語資料を読む

専攻：日本語学(文学・言語学コース)

授業名：『天草版平家物語』研究

『天草版平家物語』研究』は、中世の日本語資料『天草版平家物語』(文禄元(1592)年)をとりあげ、仮名遣い・表記、語彙・語法、文法等の中世日本語の様相や日本語史の問題について、受講生の興味のある問題を調べて発表し、全員で討論する日本語学の演習の授業です。『天草版平家物語』は、天草のイエズス会学林で刊行された平家物語のポルトガル式ローマ字表記の抄訳本です。

『天草版平家物語』では、例えば「へいけものがたり(平家物語)」が「Feiqe Monogatari」、「きこえたれ(聞えたれ)」が「qicoyettare」と表記されています。「へ」が「Fe」に表記されているのは、当時の日本語の「へ」が語頭で「ふえ」の音だったからです。また、「え」が「ye」に表記されているのも、



『天草版平家物語』冒頭

当時の「あ」行の「え」が「いえ」の音だったからです。このように、『天草版平家物語』はローマ字表記され、さらに、口語資料の性質が強いという点で、生きた中世の日本語の観察に重要な資料です。

受講生は日本語学専攻の3・4年生の学部生と大学院生です。初回の授業の時に発表順番と担当箇所を決めます。発表の順番になると、まず、担当箇所のローマ字をかな書きにしてもらい（Feiqe Monogatari→へいけものがたり）、語釈と本文解釈をして、基礎データを作成してもらいます。この作業は、日本語学研究室に備わっている中世日本語の辞書や語彙・語法の参考書を参考に行います。次に、基礎データを基に発表者の考える疑問点・発展的課題を整理して発表するという手順です。この過程を通して、受講生は、四百年ほど前の日本語を直接体験することができます。日本語学研究室は古代や中世、近世の日本語資料が充実しており、授業は歴史的な日本語を直接体験できる場にもなります。

[金 銀珠 (きむ・うんじゅ, 准教授)]

授業紹介—File63

自己を振り返り、考える 一人類学の理論を通じて—

専門：文化人類学・宗教学・日本思想史（総合人文学コース [大学院]）

授業名：人類学の記述と解釈

「文化相対主義」という言葉をご存知ですか？ 世界には様々な文化がありますが、これらの文化はみな平等で、固有に価値を有しているというのが文化相対主義です。グローバル化や情報化によって、自分と異なる考えや価値観を持つ文化に触れることが多くなった今、それらと相互に理解しあい協力していく上で、このことは非常に大切です。ところがこの授業では、その「常識」に“？”が投げかけられます。「文化相対主義って、本当に平等なの？」—私たちはいま、文化相対主義に関する英語の論文を読み進めながら、この問題について理解を深めています。



授業風景

人類学という学問は、異文化を研究するという点で、「他者」を正しく理解することがとても重要です。文化相対主義は、一見異文化を尊重しているように思えますが、より深く考えれば、結局は自分たちの文化の価値観を基準にして、相手の文化を「解釈」してしまっているのです。その意味では、自分たち自身の考え方を振り返り、これで良いのかと反省するのもまた、とても大切なことなのです。

もちろん英語の論文なので、予習の段階で自分で訳を行い、その内容を理解しておかなければなりません。しかし、専門性も高く、ややこしい理論なども取り上げられているので、英語で読んでもすんわりとは頭に入ってきません。それを理解するのは一筋縄ではいきませんが、授業の中でみんなで討論し、納得するまでその内容を検討します。先生も、いろんな例や要点を挙げて、私たちの理解を進めてくれます。この時の先生の知識は、本当に頼りになりますよ。先生や学生同士がみんなで一つのテーマに向き合う授業はやりがいがあって、大学院は面白い所だということを改めて実感させてくれます。

[山本 志朗 (博士前期課程2年)]

最近の文学部

9月の大学は…

授業もないし、学生も教員ものんびりしているだろうって思いますか？ 実は授業のないこの9月には大学院の入試（第1期）や編入学試験があります。4年生はまだ卒論の執筆（準備）中ですが、人によっては院入試の受験勉強を並行して行うこととなりますし、教員は入試問題の作成等に追われることとなります。それでも、多くの教員は、まとまった時間が取れるチャンスとばかりに、海外での調査などに慌ただしく旅立って行きますよ。（U記）

*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は…
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで（『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります）